

「宮崎君の配属は北九州です。」

10月1日に行われた内定式で私は配属先を初めて知らされました。高校卒業まで兵庫の実家で育ち、その後の大学院卒業までの8年間を北海道で過ごした私にとって、北九州は想像もできない土地柄でした。最初は北九州市と福岡市が同じ都市であると勘違いしていたほどでした。

そんな私が初めて「ゆめ広場」を訪れたのは、6月27日の午後3時のことでした。

その時、ちょうど広場には「いるだけボランティア」のAさんとBさんがいらっしやり、「いるだけボランティア」の概要を詳しく教えて下さいました。その日以来、平日は仕事上がりの午後7時から8時まで、そして週末は時間が許す限り、「ゆめ広場」に顔を出すようにしていました。

それまでボランティアというと、こちらが相手に何かをしてあげなくてはいけないという印象があったのですが、いるだけボランティアはそういった心構えではなく、自分の出来る範囲から始めようというスタンスであったため、慣れない会社勤めを始めたばかりの私でも、無理なく続けることができました。

また、他のボランティアの方や「ゆめ広場」を利用している方々ともお話をしたり、食事を共にしたりするなどといった交流を持つことができたのも、自分にとって大きな財産となりました。

「地域通貨オリオン」に関しては、直接利用する機会はなかったのですが、7月9日に北九州市立大のひびきのキャンパスで行われたオリオン交流会に参加させて頂きました。留学生を含め、30名を超える方たちとお話することができ、大変楽しい時間を過ごすことができました。もっとも、自分が一番留学生扱いと勘違いされていたことは否めませんが...

7月18日に行われた「ゆめ広場の茶話会」も思い出深いものとなりました。私とほぼ同時期に「ゆめ広場」にやってきたCさんのライブが行われたのです。Cさんは私と同様、ギタリストの押尾コータローの大ファンであり、ライブでも『戦場のメリークリスマス』を押尾さながらに演奏して下さったことが印象に残っています。

8月に入り、私が今の職場を辞めて大学院に戻るかどうか悩み、体調を崩していた時も「ゆめ広場」の方々が心配して下さいました。Cさんは私のアパートまで駆けつけて下さったほどでした。

今の職場を辞め、北九州を去ることを決意した時、真っ先に思い浮かんだことは「ゆめ広場」のことでした。「せっかく皆さんによくしてもらっているのに、何の恩返しもできない、どうすればいいのだろうか？」折角、体調が元に戻って広場に顔を出しても、自分の決意を告げることができませんでした。

ようやく、8月14日にDさんに北九州を去ることを告げることができたのでした。Dさんは、急な申し出にも関わらず、私のために送別会を開いて下さり、実に多くの方がお忙しい中、送別会に集まって下さりました。自分としては、一ヶ月半という短い期間であったのでまさか送別会を開いて下さるとは思いもしませんでした。「ゆめ広場」の皆さんの温かさを改めて実感するとともに、このような方々と一緒に過ごすことができた一ヶ月半が掛け替えのない濃密な時間であったんだとしみじみと感じました。

折尾駅の改修やWAMの事業など、「ゆめ広場」を取り巻く環境は刻一刻と変化していくことが予想されますが、私は皆さんなら、たとえどのような困難に遭遇しても、絶対に乗り越えて行けると感じています。そのためのパワーや団結力、そしてなによりもゆめ広場の皆さん一人ひとりの温かさが凝集されたのが私の送別会であったと思うからです。

だからわたしは「ゆめ広場」の今後に関して心配することは何一つなく、逆にこれからどんな展開を見せていただけるのか楽しみにしています。

遠く北海道からではありますが、皆様のご活躍を見守っていきたいと思います。一ヶ月半という短い間でしたが、実に多くの方にお世話になりました。

この場をお借りして、御礼申し上げます。ありがとうございました。